



AUTUMN'97  
KYOTO MUSIC FESTIVAL

京 都 の 秋 音 楽 祭 '97

## 目次 (Contents)

ご挨拶 ● (京都の秋 音楽祭'97実行委員会名誉会長・京都市長：榎本頼兼) — 2  
1978年 アメリカ夏期音楽祭 見聞記 ● 中原昭哉 — 3

## スケジュール (CONCERT SCHEDULE)

- 10月
- 11日(土) ● 京都市交響楽団第398回定期演奏会 — 9  
The 398th Subscription Concert of Kyoto Symphony Orchestra...Oct. 11th (SAT)
- 11日(土) ● ボザール・トリオ — 10  
Beaux Arts Trio...Oct. 11th (SAT)
- 12日(日) ● プラハ交響楽団 — 11  
Prague Symphony Orchestra...Oct. 12th (SUN)
- 14日(火) ● オラトリオ「マリアの生涯」 — 12  
Oratorio "The Life of VIRGIN MARY"...Oct. 14th (TUE)
- 15日(水) ● 四方恭子 ヴァイオリン・リサイタル — 13  
Kyoko Shikata Violin Recital...Oct. 15th (WED)
- 18日(土) ● 南蛮音楽伝来〜カクレキリシタンが伝えた祈りの歌「おらしょ」 — 14  
The Introduction of Occidental Music Into Japan...Oct. 18th (SAT)
- 24日(金) ● 〈プラハ文化週間〉 M. ノスティッツ弦楽四重奏団 — 15  
M.Nostitz Quartet <Week of Prague Culture in Kyoto>...Oct. 24th (FRI)
- 25日(土) ● 中野振一郎 チェンバロ・リサイタル — 16  
Shin- ichiro Nakano Cembalo Recital...Oct. 25th (SAT)
- 27日(月) ● 日本フィルハーモニー交響楽団 — 17  
Japan Philharmonic Symphony Orchestra...Oct. 27th (MON)
- 27日(月) ● 〈プラハ文化週間〉 ヴィルジーニー・ヴァルテロヴァ・チェコ歌曲の夕べ — 18  
Virginie Walterova sing Czech Songs <Week of Prague Culture in Kyoto>...Oct. 27th (MON)
- 11月
- 5日(水) ● 現代邦楽アンサンブル — 19  
Contemporary Japanese music Ensemble...Nov. 5th (WED)
- 13日(木) ● チェコ・フィルハーモニー管弦楽団 — 20  
Czech Philharmonic Orchestra...Nov. 13th (THU)
- 14日(金) ● 再発見!モーツァルト — 21  
Mozart arranged by Clementi into chamber music version...Nov. 14th (FRI)
- 21日(金) ● リオネル・ロググ パイプオルガン・リサイタル — 22  
Lionel Rogg Pipeorgan Recital...Nov. 21st (FRI)
- 23日(日) ● 〈KIMS〉ペーター・ギルケ指揮 京都市交響楽団 ヴァイオリン・トマス・ブランディス — 23  
Kyoto International Music Session: Kyoto Symphony Orchestra Conducted by Peter Gülke Violin: Thomas Brandis...Nov. 23rd (SUN)
- 25日(火) ● 〈KIMS〉トマス・ブランディス&クリスチャン・ツァハリアス デュオ・リサイタル — 24  
Thomas Brandis & Christian Zacharias Duo Recital <KIMS>...Nov. 25th (TUE)
- 27日(木) ● 京都アカデミック・シンフォニー・オーケストラ — 25  
Kyoto Academic Symphony Orchestra...Nov. 27th (THU)
- 27日(木) ● 〈KIMS〉クリスチャン・ツァハリアス ピアノ・リサイタル — 26  
Christian Zacharias Piano Recital <KIMS>...Nov. 27th (THU)
- 29日(土) ● 京都市交響楽団第399回定期演奏会 — 27  
The 399th Subscription Concert of Kyoto Symphony Orchestra...Nov. 29th (SAT)
- 19日(水)〜28日(金) ● 京都国際ナショナル・ミュージック・セッション — 28  
Kyoto International Music Session...Nov. 19th ~ 28th

主催：京都の秋 音楽祭'97実行委員会／京都市／財団法人 京都市音楽芸術振興財団



## ごあいさつ

この度、新たに「京都の秋 音楽祭」を開催する運びとなりましたことは、国際文化都市・京都にとりまして、誠に喜ばしいことであります。

本市では、京都の音楽文化の発展と、音楽を通じての国際交流を図るため、平成6年度まで8年間にわたり、関係者の御協力を得て「京都国際音楽祭」に取り組んでまいりました。

また、平成7年秋には、京都の音楽文化の拠点として京都コンサートホールが開館し、同年のオープニング記念公演、平成8年秋の京都音楽祭プレイベントの開催を経て、今年から装いも新たに「京都の秋 音楽祭」として、更にグレードの高い音楽祭を目指し、開催することとなりました。

本音楽祭の開催は、市民を初め、多くの皆様に質の高い音楽芸術の魅力に触れ、親しんでいただくとともに、国際的な視野の中で、新たな音楽芸術の創造を目指し、京都が文化首都として21世紀へ大きく発展していくうえで、大変意義深いことであると考えております。

今回開催する「京都の秋 音楽祭'97」では、本市が姉妹都市として友好を深めるプラハ市を初め、国内外から世界的に著名なオーケストラや演奏家、京都にゆかりの深い音楽家などによる多彩なコンサートが約50日間にわたり繰り広げられます。また、音楽芸術に対する更なる理解と学習のための催しも行われ、まさに京都の秋は、華やかな音楽の一大ページェントで色濃く染まることとなります。

是非、市民の皆様方を初め多くの人々に、世界のアーティストによります熟演の数々を心ゆくまで楽しんでいただきますとともに、音楽芸術への理解を更に深めていただきますことを念願しております。

結びに、本音楽祭の開催に当たり、御尽力を賜りました関係者の皆様方に深く感謝を申し上げますとともに、本年から始まる「京都の秋 音楽祭」が今後ますます発展してまいりますことを心から祈念いたします。

京都の秋 音楽祭'97実行委員会名誉会長

京都市長 榎本頼兼



# 1978年 アメリカ夏期音楽祭 見聞記

中原昭哉

## 1 ● サンタ・フェ夏期音楽祭

私がアメリカの様々な夏期音楽祭を初めて見聞したのは、今から19年前の1978年7月のことであった。ロサンゼルスからジェット機と車を使い、最初に着いたところはニュー・メキシコのサンタ・フェで、標高7,000フィートのこの地は、真夏でも15度前後の涼しく乾いた気候で、避暑と観光を兼ねた人々が各地から集まり賑わっていた。

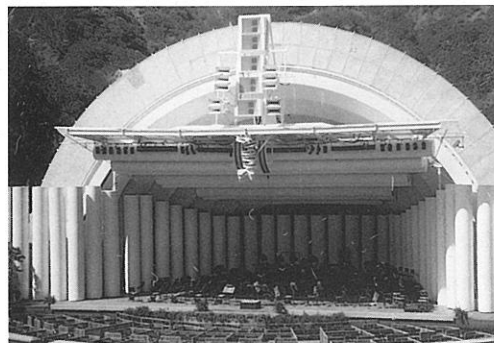


サンタフェにあるアメリカでもっとも古い歴史的建造物

ここでは7月上旬から22年の歴史を持つサンタ・フェ・オペラ祭と6年目を迎えたサンタ・フェ室内楽祭が開かれていた。このサンタ・フェ室内楽祭の音楽の中心的役割を担う大山平一郎は、当時30歳になったばかりの京都出身のヴィオラ奏者でカリフォルニア大学音楽学部のヴィオラと室内楽の助教授の地位にあり、また、日本人としては数少ないマールボロ出身の奏者であった。私は7月24日、美術館でリハーサルとコンサートを聴くことができた。演奏曲目はヴァーニック「カーディッシュ・レクイエム（インドシナの犠牲者たちへの世俗的儀式）」とシューベルト「五重奏作品163」であった。1977年ピューリッツァ賞を受賞した作曲家ヴァーニックの「カーディッシュ・レクイエム」はヴァーニック自身の歌詞によって書かれた三楽章構成の作品で、五線譜の限界を極度に生かし、インドの弦楽器とテープに吹き込んだ歌を採り入れて書かれていた。リハーサルでは、演奏家たちが自由な意見のやりとりを繰り返し、各フレーズごとに曲想の付け方について納得のいくまで練習を続ける姿が印象的だった。アメリカで室内楽祭といえばマールボロの名が上がるが、サンタ・フェ室内楽祭はこのマールボロ出身の30歳前後の若い演奏家たちを中心に編成され、その中で、大山平一郎はプログラムや人選など音楽上の中心的役割を果たしていた。この時の演奏家の中でとくに注目されたのはチェリスト、ラルフ・カーシュバウムで、彼はアンドレ・ナヴァラに師事し、第4回チャイコフスキー・コンクールで優勝し、1976年ニューヨークでソロ・デビューを果たすなど、すぐれたキャリアの持ち主であった。

一方、サンタ・フェ・オペラ祭は7月5日から8月26日まで、郊外の丘の上にある半野外劇場で開催されていて、ブッチーニ「トスカ」、リヒャルト・シュトラウス「サロメ」、ロッシーニ「カウント・オリイ」、チャイコフスキー「オネーギン」、ステファン・オリヴァー「ダッチェス・オブ・マルフィ」が上演されていたが、私は7月26日にチャイコフスキー「オネーギン」を聴くことができた。半野外とはいえ、サンタ・フェ・オペラ劇場は音響学的によく考えられた設計で、ここへ来る前にロサンゼルスハリウッド・ボウルで味わった音響上の失望感を十分に回復してくれた。

丁度、ハリウッド・ボウルも夏期音楽祭で、ズービン・メータを音楽監督に、ロサンゼルス・フィルがロストロポーヴィチ、パールマン、エッシャンバッハ、ピーター・ゼルキンら日本のファンにも馴染みの演奏家を招いてコンサートが続けていたが、5,000人以上も収容できる大野外劇場で、大きいスピーカーを使っただけの音響は、すぐれた演奏家の技術をして私の耳に不満を残した。その点、サンタ・フェの劇場はまことにすばらしい。涼しい風、きらめく星空、そし啼く虫の音の中でオペラが上演される。世界中のオペラ歌手が夏のサンタ・フェで歌うことを願うのも無理からぬ話である。



ハリウッドボウルのステージ

サンタ・フェ・オペラの総監督ジョン・クロスビーはバルチモア、エドモントン、カナディアンなどのオペラ劇場の指揮者、アメリカ・オペラ会長という経歴を持ち、「オネーギン」を指揮したブルース・フェルデンは、ニューヨーク・フィルのほか、ピッツバーグ・オペラ、ジュリアード音楽学校、マンハッタン音楽学校、プリンストン大学などのオーケストラの指揮者という肩書を持っていた。また、歌手たちは、メトロポリタン・オペラ、ニューヨーク・シティ・オペラ、サンフランシスコ・オペラはじめ、イングリッシュ・ナショナル・オペラなど、内外の様々なオペラ劇場で活躍する有能な人材が登用されていた。

## 2 ● アスペン夏期音楽祭

ニュー・メキシコのサンタ・フェからデンバー経由でコロラド州のアспенに飛ぶ。アспенは8,000フィート近い高地にあり、4千人ほどの小さい町で、裕福な人たちの別荘地である。年誌「アспен・ミュージック・フェスティバル1978」にはアспен・フェスティバル略史が書かれている。それによると、1880年頃アспенは銀鉱ブームで賑わったが、その後、銀の暴落で廃村のようになった。しかし、1930年に、この地域がスキーヤーにとって恰好の地であることが分かり、1945年にはアメリカ・コンテナー株式会社社長ワルタ・ペペケとそのアспен社の仲間たちが健康、芸術、音楽、教育のための施設を持つ平和な社会を目指してアспенを再建した。1949年にはゲーテ生誕二百年祭と音楽祭が行われ、A・シュバイツァ、ピアティゴルスキー、A・ルビンシュタインなどが集まり、アспенは国際的に知られるようになった。1951年に音楽研究所設立、次いで1954年にアспен音楽協会が発足して、アспен音楽祭と夏期学校が開催され、アспен人間学研究所とともに大きい文化的貢献を果たすようになった。

1978年のアспен音楽祭は6月23日から8月20日まで毎日開かれ、同時に学生のための音楽学校と卒業生や社会人のための特別講座としてマスター・クラスが開かれていた。私は、郊外の大きいテントで作られたアンフィ劇場で3日間演奏を聴いた。テントの中は有料だが、学生たちは自由に出入りできる。また、テントの外では、青空を仰ぎながら沢山の聴衆が演奏に聴き入っていた。音楽祭のオーケストラは、

一流の演奏家が学生たちといっしょに演奏するために、若い学生たちにとってはこの上ない刺激となっている。私はアспен滞在中に、京都の上京中学校出身のファゴット奏者、中川良平に出会った。奇遇であった。しかし、彼の話を聴くと、彼は毎年アспенにオーケストラ演奏とファゴット指導のために招かれているとのことであった。

土地の人は、アспенの町は夏は音楽祭、冬はスキーで賑わうと話していたが、学生たちにとって眺めのいい涼しいアспенはなんと言っても、夏期学校が各大学の単位認定に結びついていることが大きい魅力であった。教授の面々をみると、ヴァイオリンのズーカマン、パールマン、指揮のラインスドルフ、オーボエのレイ・スティル、ヴィオラのタンブラー、ピアノのアクス、作曲のティベットなど、多士済々である。7月29日、アспенの大テントのステージでシューベルト「ピアノ・トリオ作品100」が、パールマン（ヴァイオリン）、ロナルド・レオナード（チェロ）、アクス（ピアノ）のトリオで演奏されたが、その時のパールマンのヴァイオリンの美しさが今でも印象深く私の心に刻み込まれている。

### 3 ● ニューヨークの夏

アспенのあと、7月31日にデンヴァー経由の便で私はニューヨークを訪ねた。カーネギー・ホールの秋からのシーズン予告にはメニューヒン、ズーカマン、シルバースタインと並んでパールマンの名があり人気上々であった。秋からのカーネギー・ホールは実に輝かしくマゼールとクリーブランド、オーマンディとフィラデルフィア、ショルティとシカゴ、ロストロポーヴィチとナショナル・オーケストラ、秋山和慶とアメリカン・シンフォニー、小沢征爾とボストン・シンフォニーといった具合に、まるでニューヨークにいとアメリカのオーケストラを居ながらにして全部聴くことができるその演奏会の豪華さに驚嘆する。そして、カーネギー・ホールの予告に大きい見出しで「小沢一輝かしい指揮、彼の棒の下にボストン交響楽団はこれまで出したことがないよい音を！」とある。アспенで出会った中川良平は、小沢征爾のことを頭の中に何か精巧な機械が入っているように敏感だと話していたが、思えば、今から19年前、当時のボストン・シンフォニーは小沢を得て再び黄金時代を迎えようとしていたことをこの予告が示している。

カーネギー・ホールは夏期は休業するが、リンカーン・センターのアヴェリー・フィッシャー・ホールでは1966年に創始されて以来、第12回目の「モーストリー・モーツァルト・フェスティバル」が7月17日から8月26日まで開かれていた。30家ほどのアメリカの大財閥の中でもとりわけロックフェラー家が一番音楽に力を入れているということであったが、このモーストリー・モーツァルト・フェスもロックフェラー三世の援助によっていた。連日満席という盛況で、例えば、当時、京都の公演では入りの悪かったピアノのアリシャ・デ・ラローチャの8月8日のリサイタルは7月中に売切れだった。

この年7月の広報誌「リンカーン・センター」には「モーストリー・モーツァルト・コンサートに来る聴衆の半数は、彼らの大半は普段はクラシックの演奏会に顔を出さない18から35歳の若い年齢層である。コンサートの服装は出来るだけカジュアルに、というわけで、センターの売場でモーストリー・モーツァルト・アートのTシャツ、そして今年の新しいモーストリー・モーツァルト・ジョギング・シャツもどうぞ…」と書かれている。私は8月1日、アヴェリー・フィッシャー・ホールで巨匠アレクサンダー・シュ

ナイダー（ヴァイオリン）と若いピーター・ゼルキン（ピアノ）、ヨー・ヨー・マ（チェロ）のトリオを聴いた。演奏曲目の中で最も印象深かったのはシューベルト「ピアノ・トリオ作品100」の演奏であった。年老いたアレクサンダー・シュナイダーの音と若いゼルキンとヨー・ヨー・マの間にはっきりと年輪の差が感じられた。当時のアメリカの演奏の傾向として、一つは明快な音楽や鮮明な音楽、もう一つは現代音楽への嗜好があった。シュナイダーの年輪の深さ以上に、若いゼルキンとヨー・ヨー・マの力と天性による新しい音がニューヨークで人気を博していた。私が訪ねたサンタ・フェ、アспен、そして、ニューヨークのあと訪れたタングルウッド音楽祭でも、古典的な作品に並んでヨーロッパやアメリカの現代音楽が必ずと言っていいくらいプログラムに採り入れられていた。

### 4 ● タングルウッド音楽祭

8月3日、私はニューヨークを立ち、ピッツフィールド空港に着いた。ピッツフィールドは本当に小さい空港で、ここからは足の便がなく、私は5日間、レンタカーでタングルウッドとマールボロを訪ねることになった。先に予約していた赤色のトヨタ・カローラで、先ずタングルウッドの宿泊先「ホリデー・イン」に向かう。タングルウッドはボストンの西方のパークシア地方の一地区で、グリーン・フィールドとも言われるくらい、あたり一帯が森と川と小さい湖に恵まれたところである。

音楽祭のプログラム「タングルウッド1978」に、タングルウッドの略史が掲載されている。それを見ると、別名パークシア音楽祭とも呼ばれるタングルウッド音楽祭は、パークシアの音楽愛好家たちが1934年8月、ヘンリー・ハドレイとニューヨーク・フィルハーモニーのメンバーを招いてインターラーケンで野外コンサートを開いたのが始まりで、翌々年8月に音楽祭の委員会がクーゼビッキーとボストン交響楽団を招いて大テントの中でコンサートを開いたところ、1万5千人の聴衆が集まった。その後、大雨のために楽器が使えなくなるというハプニングがあって、現在のような立派な大ホールが作られたのだという。この大ホールは今でも「音楽小屋」と名付けられて、その謂れを伝えている。6,000人収容できる三方壁面のないこの大ホールは、緑一色の美しい森と青々とした湖に囲まれていて、音楽を聴く人々に美しい野外の空気と溶け合う心



タングルウッドのパークシア音楽センター



地よさを満喫させる。ここには、大ホールのほかに室内楽ホールやいくつかの小さいスタジオがある。今では年間25万人の人たちが訪れるという。アーサー・フィードラーとポップスが毎夏演奏するほかピュラー・コンサートも開かれているという。

小沢征爾はボストン交響楽団の音楽監督として今やタングルウッドで最もよく知られた存在であるが、多忙な時間を割いて日本の若い音楽家たちを自分の別荘に呼んでいろいろと世話をしたりアドバイスをしたりしているという。

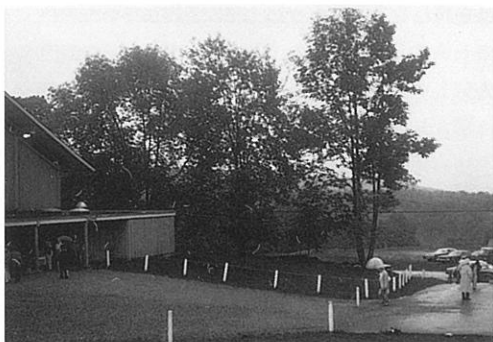
8月4日、私はエド・ドゥ・ヴァール指揮、ボストン交響楽団とソプラノ、ベニタ・ヴァレンテが出演する演奏会を聴いた。ベートーヴェン「エグモント」の抜粋と「第五交響曲（運命）」が演奏されたが、ヴァレンテはメトロポリタン・オペラ所属のまさに才色兼備の歌手であり、ヴァールは小沢の推奨する若い指揮者だった。

この日、たまたま私はタングルウッドの駐車場で京都から研鑽に来ていたチェリスト、柳田耕治に出会った。立ち話をするうちに、彼はボストン交響楽団のメンバーやいっしょに合奏する仲間たちと交わって、初めて日本では味わえないオーケストラの面白さや楽しさが分かったと語ってくれた。

## 5 ● マールボロ音楽祭

バーモント州の最南端のブラットルボローという町から車で30分ほど山の中に入ったところに500人くらい収容できる木造のホールがある。これがマールボロ音楽祭のコンサートホールである。バスもタクシーもないこんな人里離れたところにどうして満席の聴衆が集まるのであろうか。

年誌「マールボロ音楽1978」をみると次のように書かれている。マールボロはヴァイオリニスト、アドルフ・ブッシュが1951年に弟ハーマン、従兄弟ドルフ・ゼルキン、コレギュー・マルセル、ルイス&ブランシュ・モイーズとともに設立した音楽祭で、ブッシュ独自の考えは、マールボロに芸術家が寄り合って互いに意見を交わし合ったり、膨大な室内楽の文献を探求し合う芸術家の生活共同体（コミュニティ）を実現することであった。そして、初めての夏、納屋や農家を使って行われたリハーサルやコンサートが、新たにマールボロ・カレッジの創設となった。創設者たちは、さらにマールボロ音楽は、単なる音楽学校や音楽祭ではなく、音楽家たちが日々の生活から解放されて自由な雰囲気の中でいっしょに勉強する一種の音楽避難所ではなくてはならないと考えるようになった。1978年夏は、およそ70人がアメリカ、オーストリア、英国、ドイツ、イスラエル、イタリー、ハンガリー、ウルガイから参加し、マールボロに住んで二カ月間様々なジャンルのレパートリーを学び深めるが、巨匠や若い演奏家たちは対等な立場でいっしょに演奏する。そして、ウィークエンド・コンサートのフェスティバル・コンサートのため



マールボロ音楽祭演奏ホールの駐車場

に選ばれた楽曲は、共同研究から生み出された新鮮さと精神を反映する。

私は、幸いにも8月5日、6日とウィークエンド・コンサートを聴く機会を得た。私が聴いた最高の演奏は、ブルーノ・カニーノ（ピアノ）、ミッシェル・スターン（ヴァイオリン）、サラ・クラーク（ヴィオラ）、ジュリー・グロスマン（チェロ）によるフォーレ「ピアノ四重奏曲作品15」であった。マールボロでの演奏は、まさにマールボロの音としか表現しようのない徹底的に弾き抜かれた演奏で、ある種のすさまじさを感じさせた。優秀な演奏家たちが楽曲一筋にいっしょに生活して作り出した音楽がここにあるという実感が聴く者の心に迫る。私は演奏を通して、マールボロの音楽を求めて集まる音楽家や聴衆が多いことの理由を理解することができた。

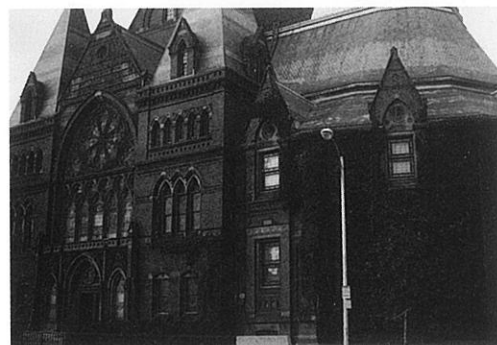
## 6 ● マールボロを去ってボストンへ

8月7日、マールボロを最後に、私はやっとレンタカーから解放され、バスでボストンに向かう。3時間余りでボストンに着く。ボストンではケンブリッジ区のサンダース劇場でハーヴァード大学の夏期学校の一環としてハーヴァード大学室内管弦楽団の演奏会が開かれていた。当夜のレオン・カーシュナー教授の指揮は、アメリカ人気質そのままの表現であった。明快にして中間色のない、時折どなりつけるようなアクセントを持った演奏は「アメリカン・イングリッシュ」とでも言いたい。しかし、このような「エクスサイティング」な演奏を多くのアメリカ人は好むようである。しかし、小沢や秋山のように非凡な指揮技法を身につけ、アメリカ人になく日本人独特の繊細な美意識を身につけた音楽家に対して大きい尊敬を抱いている。

私はアメリカの各地の夏期音楽祭をまわって痛感したことは、日本の音楽界が今後発展していくためには経験豊かな音楽家と若い学生たちとの分け隔てのない自由な演奏上の交流の機会と、それを実現させるための経済的援助の必要性だった。アメリカでは全米音楽家協会やレコード会社や企業や任意の寄付など、音楽祭や夏期学校を支える体制がとて進んでいる。それに比べると、日本は社会的にそのような体制が大変弱いということだった。

このころ、京都では国際音楽祭を開こうという声が高まっていた。京都や奈良を訪れたことのある2、3のアメリカ人は、緑の多い美しい町で非常に印象的だったと私に話してくれた。京都の美しさを生かした企画をすれば、音楽祭の成功は間違いのない。さらに、若い学生たちの芽を伸ばすための工夫をすれば、アスペンやタングルウッドのように活気に溢れた将来性のある仕事になるであろう。

8月9日、私はこんなことを夢見ながらボストンを去った。そして、8月12日からウェスタン・オンタリオ大学で開かれる国際音楽教育会議に出席するためにカナダのモントリオールへと向かった。



ボストンのサンダースシアター

10月11日(土)

Oct. 11th (SAT)

## 京都市交響楽団第398回定期演奏会

The 398th Subscription Concert of Kyoto Symphony Orchestra

18:00 開場 19:00 開演 大ホール (Main Hall)

## 指揮：井上道義

Conductor: Michiyoshi Inoue

ハイドン：交響曲第22番 変ホ長調「哲学者」

Haydn: Symphony No. 22 in E b major "Der Philosoph"

武満 徹：「ジェモー」よりⅡ-ジェニシス、Ⅳ-アンティストロフ（ガエタノ・デローク指揮 プラハ交響楽団と共演）

Toru Takemitsu: II &amp; IV from "GÉMEAUX" with Prague Symphony Orchestra conducted by Gaetano Delogu

ドヴォルザーク：交響曲第7番 ニ短調

Dvořák: Symphony No. 7 in D minor

京都の秋 音楽祭'97は、京都市交響楽団の定期演奏会で幕を開けます。音楽監督の井上道義の指揮により、まずハイドンの交響曲第22番「哲学者」が演奏されます。ニックネームの「哲学者」は、導入部のアダージェョの感じからこの名前が付いた言われています。次にプラハ交響楽団との共演で、惜しくも昨年2月に他界した作曲家、武満徹の「ジェモー」より第2曲ジェニシスと第4曲（終曲）アンティストロフをお聴き頂きます。作曲家自身『管弦楽作品というより大規模な室内楽作品の集合』と語っており、各奏者には大変高度な演奏技術を要求しています。2つのもの、相反するものが愛によって帰一する態を描いています。なお指揮の井上道義はこの曲を尾高忠明と共に、東京のサントリーホール開館記念の委嘱作品として同ホールで初演（1986年10月）を行いました。最後のドヴォルザークの交響曲第7番は、土くさい野性味と牧歌的な歌の高揚が巧みに織り込まれた傑作です。井上＝京響の力感溢れる名演奏が、作品に内在する劇的なエネルギーを存分に引き出してくれることでしょう。



井上道義

## Profile

## 京都市交響楽団

1956年4月創立。市民文化の形成、古都の新しい文化創造の核として日本で初の公立オーケストラとして誕生。初代常任指揮者のC.チェリウスにより急速な成長を遂げた。以降、カウフマン、森正、外山雄三、渡邊暁雄、山田一雄、ヴェルニツツィ、小林研一郎らに引き継がれ1990年より現在の井上道義が迎えられている。香港、朝鮮、フランス（京都市政百周年記念）など海外公演の実績も積み、本年春には「プラハの春」を含むヨーロッパ公演を行った。

## 井上道義（指揮）

桐朋学園大学指揮科卒。斎藤秀雄、セルジュ・チュリビダックに師事。昭和46年グッド・カンテルリ記念国際指揮者コンクールで優勝。以後ヨーロッパを中心に活動。その後ニュージーランド国立交響楽団首席客演指揮者、新日本フィルハーモニー交響楽団の音楽監督を務めるなど注目を集める。昭和63年、ロイヤル・フィルを指揮してロンドンにデビュー。また、R.クーベリックの代役としてシカゴ交響楽団の定期に登場（1993年4月）し、その後94年10月に再びシカゴ響の定期演奏会に招かれた。その他、これまでにベルリン、ハンブルグ、シュトゥットガルト、南西ドイツの各放送響、ミュンヘン・フィル、ドレスデン・フィル、フランス国立管弦楽団、レニングラード交響楽団、ハンガリー国立管弦楽団などに客演。平成2年より京都市交響楽団第9代音楽監督に就任、現在に至る。

（ガエタノ・デロークのプロフィールは、p.11をご覧ください。）

10月11日(土)

Oct. 11th (SAT)

## ボザール・トリオ

Beaux Arts Trio

17:30 開場 18:00 開演 小ホール (Small Hall)

シューベルト：三重奏曲 変ホ長調 D.897「ノットウルノ」

Schubert: Trio in E b major "Notturmo"

ブラームス：ピアノ三重奏曲第2番 ハ長調

Brahms: Piano Trio No. 2 in C major

ベートーヴェン：ピアノ三重奏曲第7番 変ロ長調「大公」

Beethoven: Piano Trio No. 7 in B b major "Erzherzog"

京都コンサートホール小ホールは室内楽の演奏会場としては、モダンなたたずまいもあって好評を得ています。開館以来このホールで世界の珠玉の演奏を、ということで毎年世界一流の芸術家を招いております。この秋は40年の歴史を持つピアノ三重奏団、ボザール・トリオが初登場となります。ピアノ・トリオと言えば三人の巨匠の集まるグループがこれまで知られていますが、ボザール・トリオはそのように強烈な個性の表現ではなく、ピアノのプレスラーを中心にした長年にわたるアンサンブルは類を見ない緻密さをもち、各人の個性が調和のとれた形で表現されています。今回はボザール・トリオのドイツ古典からロマン派の名曲を演奏します。



## Profile

## ボザール・トリオ

1954年にアメリカで結成されたトリオ。1955年、パークシャー音楽祭（現・タングルウッド音楽祭）でデビュー。創立メンバーのメナヘム・プレスラーを中心に、メトロポリタン美術館での定期演奏会を催し、そのほかモーストリー・モーツァルトやモスクワの「ロシアの冬」など、世界各地の音楽祭に出演。91年のカーネギーホール100周年記念委嘱作品などボザール・トリオのために書かれた作品も数多い。これまで30年以上にわたりレコーディングも行っておりベートーヴェン、シューベルト、シューマン、ブラームス、コルンゴルト、ツェムリンスキーなどレパートリーも幅広い。室内乐的な緊密性を第一義にしており、ソリスト達の集まる、華麗さで目を惹くトリオとは一線を画している。

10月12日(日)

Oct. 12th (SUN)

## プラハ交響楽団

Prague Symphony Orchestra

13:00 開場 14:00 開演 大ホール (Main Hall)

指揮: ガエタノ・デローグ

Conductor: Gaetano Delogu

スメタナ: 交響詩「モルダウ」

Smetana: "Moldau"

武満 徹: 「ジェモー」より II - ジェニシス、IV - アンティストロフ (井上道義 指揮 京都市交響楽団と共演)

Toru Takemitsu: II &amp; IV from "GÉMEAUX" with Kyoto Symphony Orchestra conducted by Michiyoshi Inoue

ドヴォルザーク: 交響曲第9番 ホ短調「新世界より」

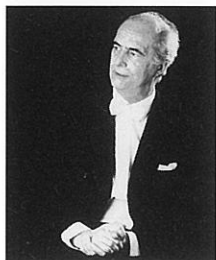
Dvořák: Symphony No.9 in e minor "From the New World"

協賛: ローム株式会社

プラハ交響楽団は、創設以来60有余年の歴史をもつ、チェコでも有数のオーケストラです。そのボヘミアの香り豊かな響きは、これまで3度の来日公演でも大変定評のあるところ。今回の京都公演は、京都市とプラハ市の姉妹都市盟約締結1周年を記念して行なわれるもので、井上道義指揮京都市交響楽団と武満徹の「ジェモー」で共演するほか、スメタナの「モルダウ」、ドヴォルザーク「新世界より」といったチェコの名曲を披露します。「ジェモー」は二人の指揮者と二つのオーケストラが同時に舞台上で演奏するという大変珍しい曲で、「双子座」という名が示すように、京都市とプラハ市との友好関係の象徴として大変相応しい曲目といえるでしょう。



プラハ交響楽団



ガエタノ・デローグ

## Profile

## プラハ交響楽団

1934年FOK交響楽団 (Film, Opera, Konzert) の名で創設される。初代指揮者はルドルフ・ベカーレックで、42年にはヴァーツラフ・スメタナ・チェクが音楽監督に就任し、以後30年にわたりその大役を果たす。その間オーケストラをチェコ・級級の団体にまで育て上げ、52年にはプラハ市議会付属のオーケストラとなり、名称もプラハ交響楽団と改めた。

72年ラディスラフ・スロヴァークがその任を引き継ぎ、77年にはイルジー・ピエロフ・ヴェックが就任。当時弱冠30歳であったピエロフ・ヴェックは、楽員の深い信頼と聴衆の圧倒的な支持を獲得し、次席指揮者のウラジミール・ヴァーレックとともに、アンサンブルに磨きをかけ、レパートリーの拡充をはかり、この間の10数年間でチェコを代表するオーケストラとして国際的な地位を築きあげた。以降90年よりベトル・アルトリヒテル、92年よりマルティン・トゥルノフスキーに引継がれ、1995/96のシーズンからはガエタノ・デローグが首席指揮者に就任した。ヨーロッパ、アメリカ、アジアへ定期的なツアーを行っており、日本へは86年の初来日以來4回目の来日となる。

## ガエタノ・デローグ (指揮)

ローマとヴェネツィアで学び、1968年ディミトリ・ミトロプーロス・コンクールで優勝。その後レナード・バーンスタインやジョージ・セルの助手を務めたあと、75年にパレルモのマッシーモ歌劇場の首席指揮者となった。78年にはデンバー交響楽団の音楽監督となり、アンサンブルの飛躍的なレベル・アップに貢献し、その業績により、名誉指揮者という称号が贈られている。また世界各地のオーケストラに度々客演しており、主要なところだけでもロンドン響、ロンドン・フィル、BBC響、クリーブランド響、ヘルシンキ・フィル、オスロ・フィル、王立ストックホルム・フィル、ウィーン響、ベルリン放送響、フランス国立管、チェコ・フィルなどがある。

レコーディングは、ロンドン・フィルとのマラー、ハイドン、チェコ・フィルとのメンデルスゾーン、シベリウス、ロッシニなどがある。1995/96のシーズンからは、プラハ交響楽団の首席指揮者に就任している。

10月14日(火)

Oct. 14th (TUE)

## オラトリオ「マリアの生涯」

Oratorio "The Life of VIRGIN MARY"

18:00 開場 19:00 開演 大ホール (Main Hall)

指揮: 林達次 管弦楽: 大阪センチュリー交響楽団

出演: 田中千恵子 (ソプラノ)

京都 大阪ゲヴァントハウス合唱団 ほか

Tatsuji Hayashi (Conductor) Century Orchestra Osaka

Chieko Tanaka (Soprano)

Kyoto Osaka Gewandhaus Chorus etc.

原 嘉壽子: オラトリオ「マリアの生涯」

Kazuko Hara: Oratorio "The Life of VIRGIN MARY"



原 嘉壽子

原嘉壽子氏 (同志社女子大学教授) のオラトリオ「マリアの生涯」。大絶賛を博した1994年のザ・シンフォニーホールでの初演以来の再演です。今回の再演では、コンサートホールの特性を生かし、舞台配置等で工夫凝らし、コンサートホール版ともいえる演奏、演出を目指しています。「人間」としてのマリア像に焦点を当てたこの大作を、初演時と同じ林達次の指揮、大阪センチュリー交響楽団と京都・大阪ゲヴァントハウス合唱団、そしてソリスト達が熱演します。この作品を完全に掌中に収めた演奏家たちによる新たな「マリアの生涯」に期待がかかります。



林 達次



田中千恵子

## 原 嘉壽子 (作曲家)

東京生まれ。1957年東京芸術大学作曲科卒業、翌年専攻科修了。池内友次郎氏に師事。在学中、安宅賞。[8楽器のための室内協奏曲]で第24回日本音楽コンクール第2位。1962年フランス、イタリアへ留学。エコール・ノルマルでH. デュティユー氏に、ニース夏季アカデミーでA. チェレブニン氏に師事。1963年ベネチア音楽院声楽科卒業。イリス・アダミ・コラデッティ氏に師事。1964年帰国後は、自作自演をふくむ声楽曲、室内歌曲を中心に活発な創作活動を行う。1982年、文化庁舞台芸術創作奨励特別賞受賞、第13回ジロー・オペラ賞特別賞受賞。1986年日本オペラ振興会台本公募第一席、第14回ジロー・オペラ賞受賞。昭和63年度芸術選奨文部大臣賞受賞、オペラ作家として揺るぎない地歩を確立。現在、新国立劇場より委嘱「罪と罰」、大分オペラ協会委嘱「瀧澤太郎」を作曲中。同志社女子大学教授。

## Profile

## 林 達次 (指揮)

1947年東京音楽学校 (現・東京芸大) 卒業。2度にわたりウィーン国立アカデミーに留学。木下保、朝比奈隆、F. グロスマンの各氏に師事。1973年以來バルセロナのマリアカナルス国際音楽コンクールの審査員をつとめる他、宝塚国際室内合唱コンクール、J.S.G. シューベルト国際歌曲コンクールの審査委員長を務める。京都・大阪ゲヴァントハウス合唱団を率いて7回にわたりヨーロッパ各国及び中国へ演奏旅行を行なう。〈林達次オラトリオシリーズ (於ザ・シンフォニーホール)〉を主宰し、ハイドン「天地創造」で10回のシリーズ完遂。第4回「東と西一幽玄のかけ橋」で能「隅田川」とベンジャミン・ブリテンの教会劇「カーリユリバー」(於ザ・シンフォニーホール) 上演に對しクリスタル賞を受賞。第43回英国オールドバラ音楽祭にこれを上演。大阪府民劇場賞、藤堂音楽賞、大阪市文化功労賞など数多くの音楽賞を受賞。現在、日本シューベルト協会理事長、神戸女学院大学名誉教授。

## 大阪センチュリー交響楽団

1989年12月創立。楽員数56人。常任指揮者にイスラエルの俊英・ウリエル・セガルを迎え、1990年3月にデビュー、同年9月に第1回定期演奏会を大阪のザ・シンフォニーホールで行い、加えて東京での定期演奏会も実施している。



10月15日(水)

Oct. 15th (WED)

# 四方恭子 ヴァイオリン・リサイタル

Kyoko Shikata Violin Recital

18:30 開場 19:00 開演 小ホール (Small Hall)

ピアノ:野平一郎

Ichiro Nodaira (Piano)

モーツァルト:ピアノとヴァイオリンのためのソナタ イ長調 K.526

Mozart:Sonata for Violin and Piano in A major K.526

ブラームス:ヴァイオリン・ソナタ第3番 ニ短調

Brahms:Violin Sonata No.3 in D minor

イザイ:無伴奏ヴァイオリン・ソナタ第1番 ト短調

Ysaye:Sonata for Violin Solo No.1 in G minor

グリーグ:ヴァイオリン・ソナタ第3番 ハ短調

Grieg:Violin Sonata No.3 in C minor

京都をふるさとする音楽家の一人四方恭子はまた、京都と姉妹都市ケルン放送交響楽団のコンサートマスターを務めるヴァイオリニストです。野平一郎は作曲家としてピアニストとして活躍中。最近この二人のデュオは各地で大変好評を得ています。四方恭子は京都コンサートホールオープニングで京都市交響楽団とメンデルスゾーンヴァイオリン協奏曲を弾き、大成功をおさめています。今回は彼女の魅力を充分お楽しみ頂くためのリサイタルで、もっとも得意とするプログラムを皆様方に披露致します。



四方恭子



野平一郎

## Profile

### 四方恭子 (ヴァイオリン)

神戸生まれ。東京芸術大学在学中に第47回NHK毎日音楽コンクールに入選、1975年安宅賞受賞。80年同大学卒業。第15回民音室内楽コンクールに“東京ブラームス・カルテット”として第2位及び斎藤秀雄賞受賞。81年より西ドイツ国立フライブルグ音楽大学に留学し、W.マーシュナー氏に師事する。82年シュポア国際コンクール第1位受賞、85年エリザベート国際コンクール入賞。マーシュナー氏のアシスタントを務めた後、87年よりケルン放送交響楽団コンサートマスターとなり、90年、首席コンサートマスターに就任。92年ライニッシュ・ムジーク・フェスティバルでケルン放送交響楽団と、また、スロヴェニッシュ・フィルハーモニー、NHK交響楽団等と協演し、好評を博している。

### 野平一郎 (作曲・ピアノ)

1953年生まれ。東京芸術大学、及び同大学院修士課程作曲科修了後、フランス政府給費留学生としてパリ国立高等音楽院で作曲とピアノ伴奏法を学ぶ。作曲を間宮芳生、ベッツィー・ジョラス、セルジュ・ニグの各氏に、ピアノ及び伴奏法を高良芳枝、アンリエット・ビュイグ＝ロジェの各氏に師事する。ピアニストとしてフランス国营放送フィルハーモニック、バーゼル放送響、アンサンブル・アンテルコンタンポラン、ロンドン・シンフォニエッタなどにソリストとして出演する一方、内外の名手と数多く共演している。また作曲家としてフランス文化省、IRCAMからの委嘱作品を含む多くの作品が、内外で放送されている。第13回中島健蔵音楽賞(1995)、第44回尾高賞(1996)、文化庁芸術選奨文部大臣新人賞(1996)、第11回京都音楽賞実践門賞(1996)を受賞。現在東京芸術大学助教授。

10月18日(土)

Oct. 18th (SAT)

# 南蛮音楽伝来~カクレキリシタンが伝えた祈りの歌「おらしょ」

The Introduction of Occidental Music Into Japan

17:30 開場 18:00 開演 小ホール (Small Hall)

解説:皆川達夫(立教大学名誉教授)

Tatsuo Minagawa (Talker)

出演:京都アカデミー合唱団

Kyoto Academy Chorus

長崎県生月(いきつき)壱部(いちぶ)カクレキリシタンの方々

Hidden Christianity in Ichibu, Ikitsuki, Nagasaki

「サカラメント提要 1605年 長崎」所収のグレゴリオ聖歌

Gregorian Chant from the "Manuale ad Sacramenta"

生月島(壱部)の「おらしょ」他

"Oratio" by hidden christianity in Ikitsuki, Nagasaki etc.

日本と西洋音楽の出合いをテーマとしたコンサートです。1549年、フランシスコ・ザビエルの来日により、キリスト教とともに西洋音楽が日本に入ってきました。キリスト教は音楽とともに儀式を執行する宗教だからです。以来1614年の徳川幕府によるキリシタン禁制までに、日本で演奏されていた西洋音楽の姿を蘇らせます。今回は天正遣欧使節が持ち帰った活版印刷機によって1605年長崎で印刷された典礼書「サカラメント提要」に収められたグレゴリオ聖歌と、カクレキリシタンが約400年もの長い間、口承で伝えてきた「おらしょ」に焦点を当てます。「おらしょ」とはラテン語で「祈り」を意味し、中でも「歌おらしょ」と呼ばれるものは、キリシタン禁制前にはるばる日本にやってきた宣教師達が生月島のキリシタン達に教えた聖歌の現在の姿です。



皆川達夫



京都アカデミー合唱団

## Profile

### 皆川 達夫

1927年東京生まれ、1951年東京大学文学部卒業、1953年同大学院終了、1955-58年、1962-64年の2回にわたってアメリカ、ヨーロッパ留学。現在、立教大学名誉教授、慶応義塾大学講師。全日本合唱センター名誉館長、近代日本音楽館副館長。専攻は中世ルネサンス・ヨーロッパ音楽史。著書に「合唱音楽の歴史」、「中世・ルネサンスの音楽」、「バロック音楽」、「西洋音楽史—中世・ルネサンス」、「オラショ紀行」、「楽譜の歴史」など多数。1978年イタリア政府よりカヴァリエーリ勲章を授けられる。NHK・FM放送「バロック音楽のたのしみ」の解説を約20年間担当、現在はNHK第一放送「音楽の泉」(毎日曜午前8時05分より)解説担当。

### 京都アカデミー合唱団

1971年、前指揮者、桑山博氏の呼び掛けにより創立。以来、小人数によるアンサンブルを楽しみ、常に質の高い魅力のある室内合唱をめざしてきた。主に、ルネサンス期ポリフォニーと近代ヨーロッパの合唱曲をレパートリーの中心として、様々な演奏活動を行なっている。

10月24日(金)

Oct. 24th (FRI)

## 〈プラハ文化週間〉 M. ノスティッツ弦楽四重奏団

M.Nostitz Quartet &lt;Week of Prague Culture in Kyoto&gt;

18:30 開場 19:00 開演 小ホール (Small Hall)

スメタナ：弦楽四重奏曲第2番 ニ短調

Smetana: String Quartet No. 2 in D minor

シューベルト：弦楽四重奏曲第13番 イ短調 D.804「ロザムンデ」

Schubert: String Quartet No. 13 in A minor D. 804 "Rosamunde"

ドヴォルザーク：弦楽四重奏曲第12番 ヘ長調 作品96「アメリカ」

Dvořák: String Quartet No. 12 in F major Op. 96 "America"

昨年春に京都市が姉妹都市盟約を締結したプラハ市より芸術家を招き、「プラハ文化週間」が開催されます。

チェコは優れた演奏家を数多く輩出していることで有名ですが、特に弦楽器奏者については、そのアンサンブルの優れていることから「弦の国チェコ」とまで言われ、最大級の賛辞が贈られてきました。

本日も聴きいただくM. ノスティッツ弦楽四重奏団は、一般にはまだ知られていないグループですが、コチアンSQ、バルトークSQ、アルバン・ベルクSQなど世界的に活躍しているグループのもとで研鑽を積み、将来を嘱望されています。チェコ国民楽派のスメタナ、ドヴォルザークの両大作曲家と、生誕200年のシューベルトの作品を組合わせたプログラムで、緊密なアンサンブルからどのような名演奏が生みだされるか、大いに期待されます。

## Profile

## M. ノスティッツ弦楽四重奏団

M. ノスティッツ弦楽四重奏団は1994年10月にプラハ音楽アカデミーの学生達により結成。当初からコチアン弦楽四重奏団のメンバーと共に活動を開始。1995年8月にはオーストリアのレイチュノーでマスタークラスの奨学金を得る。そこでアマデウス弦楽四重奏団やバルトーク弦楽四重奏団、アルバン・ベルク弦楽四重奏団、さらにプラハ弦楽四重奏団に師事する。1996年にはフランス・ツアーを行い、パリ、ノルマンディー、サンマロ等で演奏。同年、ウィーン音楽アカデミーのオーディションに合格し、そこでアルバン・ベルク弦楽四重奏団のメンバーと共に研鑽を積んだ。

マチルダ・ノスティッツ伯爵夫人の許可を得て1996年1月にM. ノスティッツ弦楽四重奏団と命名された。



M. ノスティッツ弦楽四重奏団

## ペテル・ベルナーシェク (第1ヴァイオリン)

プラハ芸術アカデミー卒業。1990年にスイスのY. メニューイン国際アカデミーで一年間の奨学金を得る。1995年にはパリ音楽院で3ヶ月間にわたって、J. ゲシュテム教授に師事し、I. グラン、P. ベルナセック教授らのもとで室内楽を学び、ペーターヴェン・コンクールで3位入賞。国際ソナタ・コンクールの「ビエルゾン1995」でファイナリストとなる。

## マルティン・コス (第2ヴァイオリン)

プラハ芸術アカデミー卒業。在学中に全国コンクールで3位入賞、またコンセルバトワールの間のコンクールで2度名譽を受けた。1990年～91年にはC. アバドのもとマラー・ユークント・オーケストラに参加。1995年以降はプラハ室内オーケストラのメンバーである。

## バヴェル・ホジェイシー (ヴィオラ)

プラハ・カルテットのメンバーであるL. マリー教授のもとでプラハ芸術アカデミーを卒業。ペーターヴェン・コンクールに参加し、コンセルバトワールのコンクールでは第2位受賞。ヴィオラ奏者としては数少ないソリストである。1990年以降はチェコ・フィルハーモニー管弦楽団のメンバーでもある。

## ペテル・シュボルツル (チェロ)

D. ヴァイス教授に師事しプラハ芸術アカデミーを卒業。ペーターヴェン・コンクールで優勝し、音楽院のコンクールで1位となる。ダラスのサザーン・メソジスト大学在学中にメドウ学校のアーツ・コンチェルト・コンクールで優勝。またコプリブス・クリスティ国際コンクールで3位入賞。1994年以来、イルジー・ビエロフラヴァヴェックを音楽監督に迎えているプラハ室内フィルハーモニー管弦楽団の首席チェリストとして活躍している。

10月25日(土)

Oct. 25th (SAT)

## 中野振一郎 チェンバロ・リサイタル

Shin-ichiro Nakano Cembalo Recital

18:30 開場 19:00 開演 小ホール (Small Hall)

G.F. ヘンデル：調子のよい鍛冶屋 ホ長調

G. F. Handel: The Harmonious blacksmith in E major

J.S. バッハ：メヌエット長調

J. S. Bach: Menuetto in G major

J. Ph. : ラモー：鳥のさえずりホ短調

J. Ph. Rameau: Le Rappel des Oiseaux in E minor

J.N.P. ロワイエ：スキタイ人の行進 ハ短調

J. N. P. Royer: La Marche des Scythes in C minor

J.B. de : ボワモルティエ：のみ ホ短調

J. B. de. Boismortier: La Puce in E minor

F.J. ハイドン：ソナタ第53番 ホ短調 Hob.XVI-34

F. J. Haydn: Sonata for Clavier No. 53 in E minor

S. ジョプリン：オリジナル・ラグズ

S. Joplin: Original rags

S. ジョプリン：クレオファ

S. Joplin: Cleopha

F. レハール：メリー・ウイドウ・ワルツ

F. Lehar: Waltz from Operetta "The Merry Widow"

J.S. バッハ：パルティータ第4番 ニ長調 BWV.828

J. S. Bach: Partita No. 4 in D major BWV. 828

京都生まれの京都育ち、京都から大阪へ、そして世界に認められたチェンバロ奏者。中野振一郎は、現在日本テレマン協会のソロ・チェンバリスト、コレギウム・ムジクム・テレマンのディレクターを務めるほか京都市立芸術大学、神戸女学院、相愛大学、エリザベト音大ほか六つの大学で教鞭をとる一方、年間80もの演奏会に出演する過密なスケジュールをこなすクラシックの演奏家。「世界の9人のチェンバリスト」の一人とも言われる「チェンバロの貴公子」。今回はスコット・ジョプリンやレハールの作品をとりあげ、古典やバロック音楽だけではなく現代までの幅広いチェンバロの楽しみを自らのトークを交えてお聴きいただくという趣向です。



## Profile

## 中野振一郎 (チェンバロ)

1964年京都に生まれる。チェンバロを鍋島元子氏に師事。1986年、桐朋学園大学音楽学部演奏学科(古楽器専攻)卒業。1990年、4回のリサイタル・シリーズ「ヨーロッパ・チェンバロ音楽の旅」を開催。作品の時代や様式、また、お国柄に応じて楽器と調律を変えるという試みに挑戦し、その類いまれな音楽性が評価され「大阪文化祭賞金賞」を受賞する。

1991年フランスの「ヴェルサイユ古楽器フェスティバル」のクーブラン・サイクルに出演。K. ギルバートやB.F. アスベレンら、欧州を代表する名手の中で唯一20歳代で「世界の9人のチェンバリスト」に選ばれる。1992年アメリカの「パークレー古楽器フェスティバル」へ最年少で参加。1993年、ロンドンのウィグモア・ホールにデビュー。

現在、日本テレマン協会のソロ・チェンバリスト、コレギウム・ムジクム・テレマンのディレクターの他、京都市立芸術大学などで後進の指導にあたっている。CDは日本コロムビアからリリースされている。

10月27日(月)

Oct. 27th (MON)

## 日本フィルハーモニー交響楽団

Japan Philharmonic Symphony Orchestra

18:00 開場 19:00 開演 大ホール (Main Hall)

指揮: 岩城宏之

Conductor: Hiroyuki Iwaki

ヴァイオリン: 加藤知子

Violin: Tomoko Kato

外山雄三: 管弦楽のためのディヴェルティメント

Yuzo Toyama: Divertiment for Orchestra

サン=サーンス: 序奏とロンド・カプリチオーソ

Saint-Saëns: Introduction et rondo capriccioso Op. 28

マスネ: タイスの瞑想曲

Massenet: Méditation from "Thaïs"

サラサーテ: ツィゴイネルワイゼン

Sarasate: Zigeunerweisen

ベートーヴェン: 交響曲第6番 へ長調「田園」

Beethoven: Symphony No. 6 in F major "Pastorale"

共催: 京都日本フィルの会・財団法人日本フィルハーモニー交響楽団  
日本フィルハーモニー協会

昨年小林研一郎の指揮でチャイコフスキーの「悲愴」交響曲を演奏し、満場の喝采を浴びた日本フィルは、近年めきめきと実力をあげています。京都コンサートホールへの再登場となる今年はマエストロ岩城宏之により「田園」交響曲を、そしてソリストには実力派ヴァイオリニストの加藤知子を迎え「ツィゴイネルワイゼン」などの名曲を演奏していただきます。「管弦楽のためのディヴェルティメント」は、岩城宏之がブラハ放送交響楽団の指揮で海外デビューするにあたり外山雄三が作曲したものです。「ドンパシ」や「木曾節」といった日本人なら誰でも知っているメロディを軽妙なタッチでオーケストラ用に仕上げた作品です。



岩城宏之



加藤知子

## Profile

## 岩城 宏之 (指揮)

昭和31年NHK交響楽団特別演奏会を指揮してデビュー。小沢征爾とともに日本が世界に誇る指揮者として、35年以來ウィーン・フィル、ベルリン・フィルなどを初めとして指揮活動を行う。NHK交響楽団終身正指揮者、メルボルン交響楽団首席指揮者。50年9月から札幌交響楽団正指揮者、音楽監督に就任。1988年よりオーケストラ・アンサンブル金沢の音楽監督を務めている。

## 加藤 知子 (ヴァイオリン)

1982年、モスクワにおける第7回チャイコフスキー国際コンクールで第2位を獲得し、注目を浴びる。ソロ・協奏曲・アンサンブルと、幅広い活躍をみせる充実の名ヴァイオリニスト。ヴァイオリンの持つ魅力を十分に楽しんでいる彼女の演奏は、私たちを幸福感で満たしてくれます。8枚のCD (日本コロムビア他) も好評発売中。

10月27日(月)

Oct. 27th (MON)

## 〈プラハ文化週間〉 ヴィルジーニー・ヴァルテロヴァー チェコ歌曲のタペ

Virginie Walterová sings Czech Songs (Week of Prague Culture in Kyoto)

18:30 開場 19:00 開演 小ホール (Small Hall)

メゾ・ソプラノ: ヴィルジーニー・ヴァルテロヴァー

Mezzo Soprano: Virginie Walterová

ピアノ: ペテル・イジコフスキー

Piano: Petr Jiríkovský

ヴィオラ: パヴェル・ホジェイシー

Viola: Pavel Horejší



ヴィルジーニー・ヴァルテロヴァー



ペテル・イジコフスキー

ブラームス: アルトのための2つの歌 作品91

Brahms: Two Songs Op. 91 for ALTO, VIOLA AND PIANO

ドヴォルザーク: ジプシーの歌 作品55

Dvořák: Gypsy Songs Op. 55

スメタナ: チェコ舞曲集より(ピアノ・ソロ)

Smetana: Czech Dances-selection (solo piano)

ドヴォルザーク: 聖書の歌 作品99

Dvořák: Biblical Songs Op. 99

プラハ文化週間のコンサート第2回はメゾ・ソプラノのヴィルジーニー・ヴァルテロヴァーのリサイタルをおき聴いたできます。今回初来日のヴァルテロヴァーは、幅広いレパートリーを誇っています。ディスクで聴く限り、柔らかく、清楚な声質を持っているようで、このことは特に宗教音楽の歌手にとっては素晴らしい美質と言えましょう。ブラームスの1863年頃の着想から20年以上経て完成された「アルトのための2つの歌」、ドヴォルザークが39歳(1880年)のとき作曲したジプシーらしい自由を愛する精神に溢れている「ジプシーの歌」、チェコ・プロテスタント聖書の詩篇から題材をとっている「聖書の歌」でどの様な演奏を聴かしてくれるか期待されます。なお1曲目のブラームスの作品で、24日に登場したM. ノスティツ弦楽四重奏団のヴィオラ奏者パヴェル・ホジェイシーが加わります。

## Profile

## ヴィルジーニー・ヴァルテロヴァー(メゾ・ソプラノ)

プラハ音楽学校でリブス・ドマニスカ教授のもとで、又カレル・ベルマン教授のもとでプラハ舞台芸術学校で研鑽を積み1985年に声楽科クラスを首席で卒業する。1987年にはシュトゥットガルトでヘルムート・リリング教授に師事。ニュアンス豊かな彼女の声は、彼女の素晴らしい解釈とあいまって、どのような曲においても強い説得力を持っている。これまでの主な演奏作品は、ドボルザークの「スターン・マーテル」「聖ルドミラ」、ベルディの「レクイエム」、レスピーギ「日没」などで成功をおさめている。歌曲では、古楽アンサンブルのムジカ・ボヘミア、バロック・コレgium、クラシック室内楽アンサンブルでは有名なレスピーギ弦楽四重奏団とも共演し高い評価を得た。1991年よりドヴォルザークの聖書の歌を含む「チェコ・セクレット・ソングス」と1992年の「ヴィルジーニー・ヴァルテロヴァー」を含む多くのレコーディングを行っている。

## ペテル・イジコフスキー

1971年にプラハに生まれる。ジーナ・ヤロスラーヴァ教授のもと4才のころからピアノを始める。1982年プラハ音楽学校でエミール・レイチュナー教授に師事し、1989年からはプラハ舞台芸術学校で研鑽を積み、1995年に卒業する。ラザール・ベルマン、ヨルジュ・ザンドール、ジョン・オコーナーなど、著名な演奏家の修士課程に参加する。1995年にはピアノ・ソロと室内楽について、バウハウス音楽院で研鑽を積み、

1992年、ノース・ロンドン・フェスティバルで1位となった。チェコ国内や海外でソロ活動を行い、チェコ放送、レコード制作に参加している。

(ヴィオリスト: パヴェル・ホジェイシーのプロフィールは、p. 15をご覧ください。)



11月 5 日(水)

Nov. 5th (WED)

## 現代邦楽アンサンブル

Contemporary Japanese music Ensemble

18:00 開場 18:30 開演 小ホール (Small Hall)

出演：京都邦楽グループ Kyoto Hougaku-group 彩(いろどり) Irodori  
みおん Mion 沢井箏曲院 京都の会和 Sawaisoukyokuin Kyoto no Kai

牧野由多可：春の海幻想

Yutaka Makino: 'Haru-no-umi' fantasy

船川利夫：箏と三絃のための嬉遊曲

Toshio Funakawa: Divertimento for Koto and Sangen

吉崎克彦：雪月花によせて

Katsuhiko Yoshizaki: For "Setsu Getsu Ka"

沢井忠夫：螺鈿

Tadao Sawai: "Raden"

藤井凡大：四つの楽器 — 古典の技法 —

Bondai Fujii: Four Instruments - The Arts of Classic

八橋検校：六段の調

Kengyou Yatsushashi: "Rokudan-no-Shirabe"



京都邦楽グループ

京都コンサートホールオープニングの理念「伝統と創生」によって組み立てられた、5つの柱の一つ「東洋の音 伝承と発展」のテーマで展開される催し物に邦楽があります。京都の邦楽の伝統的な流れと、西洋音楽との融合による新しい可能性を見つけ、古来の邦楽の良さを現代に、そして21世紀にも受継いで行ける音造りを目指したく、今年は京都大阪で活躍する4つのグループによって現代邦楽の作品を演奏、最後に京にゆかりの八橋検校の名曲「六段の調」を出演団体の有志によって演奏します。純日本的な趣きを持ちながら新しい手法と音の組み合わせで作られた現代人にも聴きやすい意欲的な作品を選び、二人から二十名程の色々な編成で構成されており現代に伝承された日本の音を味わって頂けると幸いです。

## Profile

## 彩 (いろどり)

1989年宇治在住の有志で合奏研究会として発足。

95年「彩 (いろどり)」として第1回演奏会、97年3月に第2回演奏会を開催した。

メンバーはそれぞれ異なった社中で、尺八・絃々々5名から構成され、宇治三曲協会の定期演奏会や地域の文化事業で演奏活動を続けている。

## 京都邦楽グループ

1988年「伝統を守り、新しい時代の邦楽を育てよう」と発足。

当時、邦楽界では用いられていなかった五線譜による演奏に取り組み、70年1月より毎年現代邦楽を中心とした定期演奏会を開催、本年で28回を迎えた。

他分野とも積極的に交流して多くの演奏事業を行って来た。88、89年には外務省の派遣で、アメリカ公演も行った。

## 沢井箏曲院 京都の会

1980年沢井忠夫に師事する京都の演奏家が集まり発足。

同年、第1回コンサート開催時、沢井忠夫師により命名された。

メンバーは新人を加えながら、それぞれソロ活動、アンサンブルなど形を組み替えながら活発な演奏活動を続けている。

## みおん

1993年邦楽アンサンブル「しおん」として発足。

毎年、京都もしくは大阪で演奏会を開催。

97年解散後、第・三絃アンサンブル「みおん」として古典曲を中心に京都大阪で演奏活動を続けている若手のグループである。

11月13日(木)

Nov. 13th (THU)

## チェコ・フィルハーモニー管弦楽団

Czech Philharmonic Orchestra

18:00 開場 19:00 開演 大ホール (Main Hall)

指揮：ウラディーミル・ヴァーレク

Conductor: Vladimír Válek

ドヴォルザーク：序曲「謝肉祭」

Dvořák: Overture "Carnival"

ストラヴィンスキー：バレエ組曲「火の鳥」

Stravinsky: Ballet Suite "The firebird"

スメタナ：交響詩「モルダウ」

Smetana: "Moldau"

ドヴォルザーク：交響曲第9番 ホ短調「新世界より」

Dvořák: Symphony No. 9 in E minor "From the New World"

共催：社団法人 京都音楽文化協会



チェコ・フィルハーモニー管弦楽団

チェコ・フィルは、過去11度の来日を通じて、日本の音楽ファンに最も馴染みの深いオーケストラの一つです。旧東ヨーロッパ時代から、その特色溢れる管楽器の音色、特にヴィヴァートの振幅を大きく早くかけるホルンや、少し土の匂いを感じさせる弦楽セクションの、素晴らしいアンサンブルから醸し出される独特なトーンが、聴く者を魅了してきました。ターリッヒ、クーベリック、アンチェル、ノイマンなど、音楽監督にチェコの名指揮者たちを迎え、ビエロフラーヴェック、アルブレヒト時代を経て現在に至っています。ドヴォルザークやスメタナなど、彼等のお国ものに加えて、オーケストラの機能を全開させるストラヴィンスキーで、彼らの「不滅の芸術性」が遺憾なく発揮されることでしょう。

## Profile

## チェコ・フィルハーモニー管弦楽団

1896年1月4日に発足。創立当初はプラハ国立劇場管弦楽団のメンバーによって構成されていた。

1901年にプラハ国立劇場から独立。マーラー、シュトラウス、マルク等も指揮台に立っている。1919年ターリッヒが、1936年にはクーベリックが首席指揮者となる。1945年に国立のオーケストラとなり、1946年「プラハの春」国際音楽祭がスタートした。1950年アンチェルが、1968年ノイマンが首席指揮者となる。1990年ビエロフラーヴェック、1993年からはドイツ人のアルブレヒトが首席指揮者となる。シャルル・クロス・アカデミー・ディスク大賞、フランス・ディスク大賞、ウィーンのフレーテンウアー賞、日本の芸術祭賞、日本コロムビア・ゴールド・レコード賞など数多く受賞している。12度目の来日。

## ウラディーミル・ヴァーレク (指揮者)

プラハの音楽演劇芸術アカデミーを卒業。1977~1987年までプラハ交響楽団の指揮者として活躍。1985年からプラハ放送交響楽団の首席指揮者に就任。チェコ・フィルハーモニー管弦楽団やウィーン・トーン・キーンストラー管弦楽団、オーストリア放送交響楽団とも定期的に仕事をしている。プラハ、ブラティスラヴァ、ルツェルン、モントリオール、リンツ、アテネ、イスタンブールでの音楽祭で活躍。シェリング、オISTRAフ、スーク、スピヴァコフ、マガロフ、シフなどと共演。1996年6月よりチェコ・フィルハーモニー管弦楽団の常任指揮者に就任。



ウラディーミル・ヴァーレク

11月14日(金)

Nov. 14th (FRI)

## 再発見!モーツァルト

Mozart arranged by Clementi into chamber music version

18:30 開場 19:00 開演 小ホール (Small Hall)

出演: 工藤 重典(Fl) Shigenori Kudo  
 鈴木理恵子(Vn) Rieko Suzuki  
 上村 昇(Vc) Noboru Kamimura  
 山田 武彦(Pf) Takehiko Yamada

モーツァルト: 交響曲第35番 ニ長調 K.385 「ハフナー」  
 Mozart: Symphony No.35 in D major "Haffner" K.385

モーツァルト: 交響曲第39番 変ホ長調 K.543  
 Mozart: Symphony No.39 in E b major K.543

モーツァルト: 交響曲第41番 ハ長調 K.551 「ジュピター」  
 Mozart: Symphony No.41 in C major "Jupiter" K.551

クレメンティが編曲したモーツァルトの後期6大交響曲の室内楽版です。レコード、CD、レーザーディスクといった再生装置のなかった時代、家庭で気軽に音楽を楽しむために、シンフォニーやオペラといった大編成を必要とする曲を、小規模な室内楽用に編曲し演奏するということが行なわれていました。モーツァルトやベートーヴェンと同時代の作曲家クレメンティによるこの編曲は、ピアノ、フルート、ヴァイオリン、チェロというめずらしい楽器の組合せによる四重奏版です。大好評を博した6月の第1回目(第36番「リンツ」、第38番「ブラハ」、第40番)につぐ完結編です。耳に馴染んだモーツァルトのシンフォニーが、新鮮な響きで蘇ります。また演奏者も、日本を代表するトップ・プレーヤー達が揃い、技を競います。

工藤重典



鈴木理恵子



上村 昇



山田武彦



## Profile

## 工藤 重典(フルート)

Jリ国立音楽院にて、J.P. ランバルに師事。1978年第2回Jリ国際フルートコンクール、1980年第1回ランバル国際フルートコンクール優勝。ジェシー・ノーマン、小沢征爾等世界的アーティストとの共演も多い。デビュー15周年記念リサイタル(94年11月)では東京文化会館大ホールを満席にし語り草となった。1988年村松賞受賞。Jリ・エコー・ノルマル・フルート科教授。1987年以降、サイトウ・キネン・オーケストラの首席フルート奏者。

## 鈴木 理恵子(ヴァイオリン)

1966年桐朋学園大学音楽学部卒業。ニース音楽祭やジュネーブ音楽院夏期セミナーに参加。1989年渡米しインディアナ大学にて名教授J. ギンゴールド氏に師事。サイトウ・キネン・オーケストラのメンバーとしてヨーロッパツアーなど毎回参加。1997年中葉まで新日本フィルハーモニー交響楽団のアシスタント・コンサートマスターを務めた。キャリアンよりチェコ・フィルハーモニー室内楽団と共演したデビューCD「理恵子の四季」をリリース。

## 上村 昇(チェロ)

文化放送音楽賞、京都市芸術新人賞、日本音楽コンクール第1位、海外派遣コンクール松下賞、カサド国際チェロ・コンクール第1位、京都府文化賞新人賞、飛騨古川町音楽大賞奨励賞等多数受賞。巨匠ピエール・フルニエ氏に師事。ノイマン指揮チェコ・フィル、ブラハ響と共演。NHK交響楽団ほか国内のほとんどのオーケストラと共演。ヴァイオリンのスク、クラリネットのシュミードル、メロス弦楽四重奏団との共演など活発な活動を行っている。

## 山田武彦(ピアノ)

東京芸術大学大学院作曲専攻修了後、芸大講師として後進の指導にあたる。93年フランス政府給費留学生としてJリ音楽院伴奏科に首席入学。同科を審査員の満場一致により首席で卒業。ピアニストとして国内外でクラシック、ジャズ、ラテン、シャンソン、ロック、前衛音楽等の演奏家と共演、音楽祭等で作・編曲、伴奏、音楽監督を務め、87年より室内アンサンブルを結成、自作の演奏をする他、ソリストとして現代音楽の紹介も努める。

11月21日(金)

Nov. 21st (FRI)

## リオネル・ロググ パイプオルガン・リサイタル

Lionel Rogg Pipeorgan Recital

18:00 開場 19:00 開演 大ホール (Main Hall)

ブルックナー: 交響曲第8番 ハ短調(編曲: リオネル・ロググ)  
 Bruckner: Symphony No.8 in c minor (Version: Lionel Rogg)

協賛: オムロン株式会社

京都コンサートホール「パイプオルガン・シンフォニック・シリーズ」では、昨年モーツァルトの「ジュピター」交響曲、「ワーグナーの名曲集」のそれぞれオルガン編曲版をご紹介いたしました。今年はすでに7月にウィーンのオルガニスト、トーマス・シュメークナーによる、ブルックナーの交響曲第4番「ロマンティック」で、コンサートホールの大オルガンの機能をフルに発揮した演奏で大喝采を浴びました。引き続きこのブルックナーの第8交響曲は、京都コンサートホールの委嘱により、リオネル・ロググ氏自身がオルガン用に編曲したもので、今回が世界初演となります。ブルックナーのシンフォニーにある、「オルガンの響き」を十分に再認識させてくれるコンサートです。



## Profile

## リオネル・ロググ

1936年、スイスのジュネーブに生まれる。ジュネーブ音楽院にてオルガンをピエール・セゴンに、ピアノをニキタ・マガロフに学ぶ。楽理、和声学、対位法、ピアノ、オルガンの5科目にわたってフルミエ・フリで卒業。15歳で聖ボニファース教会のオルガニストに任命され、66年まで務めた。

61年にはジュネーブのヴィクトリア・ホールでオール・バッハ・プログラムにより全10回のリサイタルを行い大評判となり、20代にして世界的オルガニストの地位を確立した。その後EMIと契約し、18枚組の「バッハ・オルガン集」をリリース、このうち「フーガの技法」はACCディスク大賞を受賞した。

現在はジュネーブ音楽院でオルガン、対位法、フーガを教えるほか、演奏活動、作曲活動も盛んに行なっている。日本人オルガニストの中にも彼に教えを受けた人は数多く、誠実な人柄と相俟ってファンも多い。



11月23日(日)

Nov. 23rd (SUN)

## 〈KIMS〉ペーター・ギュルケ指揮 京都市交響楽団

Kyoto International Music Session: Kyoto Symphony Orchestra

13:00 開場 14:00 開演 大ホール (Main Hall)

## 指揮: ペーター・ギュルケ

Conductor: Peter Gülke

## ヴァイオリン: トーマス・ブランディス

Violin: Thomas Brandis

シューベルト(ギュルケ編): 交響曲第10番 ニ長調 D.936 Aよりアンダンテ  
 Schubert (Version: Peter Gülke): Andante from Symphony No.10 in D major D.936A

ベートーヴェン: ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品61

Beethoven: Violin Concerto in D major Op.61

ベートーヴェン: 交響曲第5番 ハ短調 作品67「運命」(P.ギュルケ校訂版)

Beethoven: Symphony No.5 in C minor Op.67 (Version: Peter Gülke)

共催: 関西ドイツ文化センター

協賛: 株式会社 京都全日空ホテル/ルフトハンザ ドイツ航空会社

後援: 大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館

ペーター・ギュルケ



トーマス・ブランディス

今年のKIMSのテーマは「疾風と怒涛(シュトルム・ウント・ドラク)」から初期ロマン派へと題して1760年代以降1800年代初頭にかけての、古典派からロマン派の萌芽への流れについての検証を行います。それに最もふさわしい作曲家はベートーヴェンと言えましょう。ベートーヴェン(1770-1827)の音楽は、劇的葛藤や雄大な、結末のクライマックスなど、内面的・根源的な自己主張が聴く者に迫ります。「英雄的理念」と呼ばれるこの特質は、劇作家シラーやゲーテに共通するものです。根源はドイツにおける反啓蒙主義運動で、文学革新の形をとった爆発的な旧時代否定の運動であったのですが、これが「疾風と怒涛(シュトルム・ウント・ドラク)」と呼ばれるもので、これを契機にドイツ民族が精神的独立を獲得したことから、ドイツ民族の誇りとまで言われています。ベートーヴェンの第5番(ギュルケ版)やヴァイオリン協奏曲では、ギュルケとブランディスの手によって、エネルギーが充溢する鮮烈な演奏が期待されます。また、シューベルトが遺した断片的楽譜よりギュルケ自ら再構成した第10交響曲から「アンダンテ」が披露されるものも希有と言えましょう。

## Profile

## ペーター・ギュルケ(指揮)

1934年ワイマール生れ。チェロの研究と音楽学、ゲルマン語学、ローマン語学、哲学をワイマール音楽学校、イエナのフリードリヒ=シラー大学及びライプツィヒのカル・マルクス大学で学び、1958年にライプツィヒ大学で哲学博士の称号を取得。中世音楽でコンサート・ツアーを行う。1959年から指揮者として活動し、1964年から1976年までシュテンダール、ポツダムおよびシュトラールズントの劇場の首席指揮者として活動し、1981年ワイマール国立歌劇場の音楽総監督、また1976年からドレスデン国立歌劇場の音楽監督。ドレスデン国立歌劇場とシューベルトの交響曲の断片の校訂版をドイツ・シャルブラッテンに録音。他にシェーンベルク、ベルク、ウェーベルンの作品をユング・ドイチュ・フィルハーモニー室内管弦楽団と録音。ツィンマーマンの「驚きミズクと天駆ける天女」(オペラ)の全曲録音。音楽学者として中世とルネッサンスの音楽について上演・演奏技術上の問題点、また、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト、ヤナーチェク、ブラームス、ブルックナー、ドビュッシーと現代作曲家などについて専門的に研究し、数多くの書籍を出版。1991年には「シューベルトとその時代」、1994年には「連続点音楽」をベレンライター社から出版。その他に70に及ぶ雑誌寄稿、ベートーヴェンの交響曲第5番、シューベルトの未完成交響曲のギュルケ校訂版を出版。

1983年から西ドイツ(旧)に移住。1986年からヴッパータール市の音楽総監督。オーストリア、スイス、オランダなどで、各地のオーケストラを定期的に客演指揮している。

また、ワグナー「ニーベルングの指輪」の上演をベルリン、ハンブルク、ウィーン、パリ、デュッセルドルフ、ミュンヘン、カッセル、グラーツで行う。

(トーマス・ブランディスのプロフィールは、p.24をご覧ください。)

11月25日(火)

Nov. 25th (TUE)

## 〈KIMS〉トーマス・ブランディス&amp;クリスチャン・ツァハリアス デュオ・リサイタル

Thomas Brandis &amp; Christian Zacharias Duo Recital 〈KIMS〉

18:30 開場 19:00 開演 小ホール (Small Hall)

## ヴァイオリン: トーマス・ブランディス

Violin: Thomas Brandis

## ピアノ: クリスチャン・ツァハリアス

Piano: Christian Zacharias

C.Ph.E. バッハ: チェンバロ・オブリガートとヴァイオリンのためのソナタ ロ短調 Wq.76

C.Ph.E. Bach: Sonata for Cembalo obligato and Violin in B minor Wq.76

モーツァルト: ヴァイオリン・ソナタ第40番 変ロ長調 K.454

Mozart: Sonata for Violin & Piano No.40 in B b major K.454

ベートーヴェン: ヴァイオリン・ソナタ第3番 変ホ長調 作品12の3

Beethoven: Sonata for Violin & Piano No.3 in E b major Op.12 No.3

シューベルト: ヴァイオリンとピアノのためのソナチネ第2番 イ短調 D.385

Schubert: Sonatina for Violin & Piano No.2 in A minor D.385

共催: 関西ドイツ文化センター

協賛: ルフトハンザ ドイツ航空会社

後援: 大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館

トーマス・ブランディスは、世界最高のオーケストラとして名高いベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の“顔”として長きにわたってコンサートマスターをつとめ、またブランディス弦楽四重奏団のリーダーを務めています。クリスチャン・ツァハリアスはドイツの中堅ピアニストで度々来日しており日本の聴衆にも良く知られており、今宵はこの2人の名手によるコラボレーションをお聴き頂きます。古典派様式の完成に重要な足跡を残したC.Ph.E. バッハ(1714-88)のヴァイオリンとピアノの珍しい作品、古典派の寵児モーツァルト(1756-91)の晩年の傑作K.454、疾風怒涛のベートーヴェン(1770-1827)のソナタ第3番、それに初期ロマン派のシューベルト(1797-1828)のソナチネ第2番。この4曲をお聴き頂くことで、古典派から初期ロマン派への流れを辿っていただくことが出来ます。



トーマス・ブランディス



クリスチャン・ツァハリアス

## Profile

## トーマス・ブランディス(ヴァイオリン)

1935年ハンブルクに生まれ、6歳のときヴァイオリンをはじめた。

1952年よりハンブルク国立芸術大学でエヴァ・ハウプトマンに師事。その後、1957年にはロンドンでマックス・ロスタルのもとで研鑽を積む。1956年、旧西ドイツと旧西ベルリンの国立音楽院のヴァイオリン・コンペティションで入賞。1957年ハンブルクのバッハ管弦楽団のコンサートマスター、1959年ハンブルク交響楽団のコンサートマスター、1962-83年までベルリン・フィルハーモニー管弦楽団のコンサートマスター。1976年より旧西ベルリン芸術音楽院の教授を務める。1976年よりブランディス弦楽四重奏団のリーダーとして世界各地の音楽祭や欧米、日本での演奏活動を行う。タングルウッド、バンフ、メルボルンでヴァイオリンと室内楽のマスタークラスを持つ。ユング・ドイチュ・フィルハーモニーやECユース・オーケストラの指導、国際的なヴァイオリン・コンクールや室内楽コンクールの審査員も務める。

(クリスチャン・ツァハリアスのプロフィールは、p.26をご覧ください。)



11月27日(木)

Nov. 27th (THU)

## 京都アカデミック・シンフォニー・オーケストラ

Kyoto Academic Symphony Orchestra

18:00 開場 19:00 開演 大ホール (Main Hall)

## 指揮: オンドレイ・レナルト

Conductor: Ondrej Lenard

ベートーヴェン: 交響曲第9番 ニ短調 「合唱付」

Beethoven: Symphony No. 9 in d minor "Choral"

京都大学、同志社大学、立命館大学を中心とした学生選抜オーケストラです。昨年に続いて、指揮者にはスロヴァキア・フィルハーモニー管弦楽団首席指揮者、新星日本交響楽団首席指揮者のオンドレイ・レナルトを迎えます。京都コンサートホール・オープニング以来の、マエストロと音楽を愛する若者達の共演は、京都ならではの企画として定着しつつあります。今年はベートーヴェンの第九交響曲で第九シーズンの幕開けを華やかに飾ります。



オンドレイ・レナルト

## Profile

## 京都アカデミック・シンフォニー・オーケストラ

京都の学生選抜によるオーケストラであり、年に1回の演奏会のために様々な大学から学生の有志により結成されるオーケストラである。主なメンバーは京都大学、同志社大学、立命館大学の各交響楽団からなり、選抜という条件から、学生ながらも高い技術水準にある。

このオーケストラは、学生オーケストラ相互の交流、技術の向上、さらに文化都市である京都と市民の方々への文化的貢献を目標に1995年から活動を開始し、今年で3年目を迎えた。初年度はハンガリー国立交響楽団音楽監督のエルヴィン・ルカーチ、2年目となる昨年度は、オンドレイ・レナルトを迎え、いずれも大成功をおさめた。

## オンドレイ・レナルト(指揮)

1942年生まれ。プラティスラヴァでルドルフ・ライテルに師事。1974年ブダペスト国際指揮者コンクール第3位に入賞し、指揮者としての本格的な活動に入る。1984年から1986年までスロヴァキア国立歌劇場の首席指揮者を務めた。またワウチン国立歌劇場など世界的な歌劇場に客演し現在に至っている。

1991年、92年のシーズンよりスロヴァキア・フィルの首席指揮者の要職にある。

日本には1978年に初来日し、新星日本交響楽団をはじめ多くのオーケストラに客演している。1993年4月より新星日本交響楽団の首席指揮者に就任している。

1995年5月の同オーケストラを率いてのヨーロッパ公演では、各地で賞賛を受けた。

## みやこフィルハーモニー合唱団

「みやこフィルハーモニー合唱団」は音楽上の出身や世代、プロとアマチュアという立場の違いを越えて相互に融和協調しようとの意志の下に、管弦楽と合唱による声楽作品の演奏を目的として1991年に創立された。「自助努力」をモットーに公演毎に参加者を募り、そのメンバー構成の自在さによって、91年、ヘンデル「オラトリオ「メサイア」(モーツァルト版)を皮切りに、93年、ロイド・ウェッバー「レクイエム」、94年、スッペ「レクイエム(本邦初演)などの意欲的な企画を実現し注目を集める一方、ベートーヴェン/交響曲第9番「合唱」(小林研一郎指揮)、マーラー/交響曲第2番「復活」(小松一彦指揮)、マーラー/交響曲第8番「千人の交響曲」(井上道義指揮/コンサートホールオープニング)に出演、その演奏は常に好評をもって迎えられている。これらの成果を受けて、95年よりザ・シンフォニーホール年末恒例の「炎の第九交響曲」(小林研一郎指揮)に毎年出演、96年に京都市・ブラハ市姉妹都市盟約締結記念「市民ふれあい交流1996」に参加。また、96年より阪神淡路大震災の日にあたる1月17日にコンサートホールにて毎年、震災追悼のためにチャリティコンサートを行っている。

11月27日(木)

Nov. 27th (THU)

## 〈KIMS〉クリスチャン・ツァハリアス ピアノ・リサイタル

Christian Zacharias Piano Recital 〈KIMS〉

18:30 開場 19:00 開演 小ホール (Small Hall)

C.Ph.E. バッハ: ソナタ イ短調/ロンド ハ短調

C. Ph. E. Bach: Sonata in A minor, Rondo in C minor

モーツァルト: 幻想曲 ハ短調 K. 475

Mozart: Fantasy in C minor K. 475

ベートーヴェン: ピアノ・ソナタ第17番 ニ短調 作品31の2「テンペスト」

Beethoven: Piano Sonata No. 17 in D minor Op. 31 No. 2 "The Tempest"

シューベルト: ピアノ・ソナタ第19番 ハ短調 D. 958

Schubert: Piano Sonata No. 19 in C minor D. 958

共催: 関西ドイツ文化センター

協賛: ルフトハンザ ドイツ航空会社

後援: 大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館

ピアノのクリスチャン・ツァハリアスは既に数回来日し、ピアノ・ソロやオーケストラとの共演などで日本でも良く知られた存在です。EMIレーベルより多くのCDをリリースしており、演奏に触れてみると、曲全体の見通しの良さ、美しいタッチなどはもちろん、協奏曲の場合は自らカデンツァを作曲し披露するなど、個性的な面も合わせ持つアーティストです。今回はC.Ph.E. バッハ(1714-88)の晩年の最重要作品「専門家と愛好者のためのロンド付きピアノ・ソナタと自由な幻想曲」の第3集(1781)よりソナタ イ短調、第5集(1785)よりロンド ハ短調、「幻想曲」の分野で最も独創的な作品であるといわれるモーツァルトの「幻想曲 ハ短調」(1785)、全曲に異様に緊迫した暗い劇的なものが満ちているベートーヴェンの「テンペスト」、それにシューベルトの最晩年の作品であるソナタ第19番で、ツァハリアスの魅力をお楽しみいただきます。



## Profile

## クリスチャン・ツァハリアス(ピアノ)

1950年、ドイツ系だがインドに生れる。カールスルーエのバーデン音楽大学にて著名なロシアのピアニスト、イレーネ・スラヴィンに師事。1969年19歳でジュネーブ国際音楽コンクール第2位を受賞。その後パリでヴラド・ペルルミュテルのマスタークラスを受講した。1973年ヴァン・クライバーン国際コンクール第2位、1975年モーリス・ラヴェル生誕100年記念コンクールで優勝した。既に40タイトル以上のCDを出しており、スカルラッティのCDではエジソン賞(オランダ)を受賞した。

ドイツ系の中堅ピアニストとして定評があるが、近年はテレビ・ラジオや、映画などへも活躍の場を広げている。現代作品の優れた解釈者としても知られており、名協奏曲で自作のカデンツァを披露するなど、個性的なピアニストである。

室内楽、リサイタル、世界の第一級オーケストラとの協演などで国際的に活躍している。

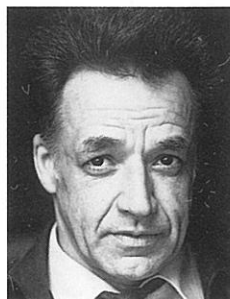
11月29日(土)

Nov. 29th (SAT)

## 京都市交響楽団第399回定期演奏会

The 399th Subscription Concert of Kyoto Symphony Orchestra

18:00 開場 19:00 開演 大ホール (Main Hall)

指揮:ペーター・ギュルケ  
ピアノ:クリスチャン・ツァハリアスConductor: Peter Gülke,  
Piano: Christian Zachariasハイドン:交響曲第26番 ニ短調「悲しみ」  
Haydn: Symphony No. 26 in D minor "Lamentazione"モーツァルト:ピアノ協奏曲第20番 ニ短調 K.466  
Mozart: Piano Concerto No. 20 in D minor K.466シューベルト:交響曲第9番 ハ長調「グレート」D.944  
Schubert: Symphony No. 9 in C major "The Great" D.944

23日に続くKIMSのオーケストラ・コンサート第2回は、京都市交響楽団第399回定期演奏会で、「京都の秋 音楽祭'97」の締めくくりのコンサートです。指揮にペーター・ギュルケ、ピアノにクリスチャン・ツァハリアスを迎えて、「疾風と怒涛(シュトルム・ウント・ドランク)」運動(23日の頁参照)の最初期にあたるハイドンの交響曲、モーツァルトのピアノ協奏曲、そして最後に初期ロマン派のシューベルトの大作、「グレート」をお聴きいただきます。

J.ハイドンは、その膨大な作品を通じて古典主義的構造と内容の確立に尽力しました。貴族によって育てられたハイドンの音楽は、当初、フランスを中心に現れたロココ芸術運動から生まれた“ギャラント様式”(フランスの絵画や室内調度にみられる繊細で装飾的で親しみやすいデザインに相当する音楽)を呈していましたが、その作品には次第に庶民の歌や踊りなどが採り入れられ、「疾風と怒涛」運動の影響を音楽において例証することになります。交響曲第26番は彼の交響曲作品の中では初めて短調でかかれたもので、音楽に深い意味を持たせようとした意図が汲み取れます。小編成のオーケストラから小気味好いハイドンが響きます。

このハイドンの偉業をさらに発展させるように、天才モーツァルトも活動を開始します。この2人の大作作曲家はお互いに影響を与え合いながら彼等の“様式”を確立していきました。ピアノ協奏曲第20番は優美さと厳格さ、軽やかさと意味深さなど巧みに織り込まれた傑作で、演奏会でも頻繁に取り上げられます。この様な古典作品においても自作のカデンツァを用いることの多いツァハリアスが今回、どの様なアプローチを聴かせてくれるのか、大変楽しみなところです。

作曲家シューベルトは、特に歌曲作品での功績が有名ですが、交響曲でも、特に晩年の作品である有名な第8番「未完成」や、今夜お聴きいただく第9番「グレート」は名作です。この曲は、厳格なソナタ形式を踏まえながら、綿々と紡ぎだされる歌(旋律)が魅力ですが、作曲者の指定通りに繰り返しを行うと60分近くにもなることから「天国的な長さ」と言われています。シューベルトの研究者としても高名なペーター・ギュルケが、作品の魅力をどの様に引き出すのか大いに期待されるところです。

(ペーター・ギュルケのプロフィールは、p.23、クリスチャン・ツァハリアスのプロフィールは、p.26をご覧ください。)

## 京都インターナショナル・ミュージック・セッション (KIMS)

シュトルム・ウント・ドランク

## 「疾風と怒涛」から初期ロマン派へ

今年のテーマは、ドイツ・ロマン派の原点。3人の巨匠を招聘し、そのエッセンスを徹底的に解明します。

## ■レクチャーコンサート

講師:クリスチャン・ツァハリアス

11月22日(土) 18:00 開演 (17:30 開場)

・会場:京都市国際交流会館・イベントホール  
・プログラム:シューベルト:ピアノ・ソナタ  
第13番より、第14番より ほか

Saturday 22nd, November 18:00

Lecture-concert on Schubert

by Christian Zacharias (pianist)

Kyoto City International Community House  
(Event Hall)

## ■マスタークラス(公開・聴講無料)

## ●ヴァイオリン・クラス

講師:トーマス・ブランディス

11月19日(水)~22日(土)・24日(月)

10:00~13:00 (9:30 開場)

・会場:関西ドイツ文化センター・京都

Master-classes by Thomas Brandis (violin)

19th to 22nd and 24th, November 10:00 ~ 13:00

GOETHE INSTITUT KANSAI

(Kyoto German Cultural Center Hall)

## ●ピアノ・クラス

講師:クリスチャン・ツァハリアス

11月21日(金)~24日(月)・26日(水)

10:00~13:00 (9:30 開場)

・会場:京都市国際交流会館・  
イベントホール (11/24日以外)  
京都市北文化会館 (11/24日のみ)

Master-classes by Christian Zacharias (piano)

21st to 24th and 26th, November 10:00 ~ 13:00

Kyoto City International Community House

(Event Hall) \*except 24th

Northern Kyoto Cultural Center Hall on Monday 24th

## ■シンポジウム

11月26日(水) 19:00 (18:30 開場)

・会場:関西ドイツ文化センター・京都  
・テーマ:「ダス・ジェニー」(天才)  
・パネラー:ペーター・ギュルケ、  
三浦信一郎、神林恒道

Wednesday 26th, November 19:00

Symposium on the "Genie" by Peter Gülke (conductor)

Shin-ichiro Miura, and Tsunemichi Kanbayashi

GOETHE INSTITUT KANSAI

(Kyoto German Cultural Center Hall)

## ■講演会

11月28日(金) 19:00 (18:30 開場)

・会場:関西ドイツ文化センター・京都  
・テーマ:「シューベルトの第九 VS  
ベートーヴェンの第九」  
・講師:ペーター・ギュルケ(指揮者)

Friday 28th, November 19:00

Lecture on Beethoven's and Schubert's Ninth Symphonies  
by Peter Gülke (conductor)

GOETHE INSTITUT KANSAI

(Kyoto German Cultural Center Hall)

共催:関西ドイツ文化センター

協賛:ルフトハンザドイツ航空会社

後援:大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館 協力:エラート音楽事務所

お問い合わせ:京都コンサートホール TEL(075) 711-2244

